書評

『空海の座標―存在とコトバの深秘学』
高木訷元　二〇一六年、慶応義塾大学出版会
Kūkai on the Philosophy of Language（『空海の真言哲学』），
translated by: Takagi, Shingen; Dreitlein, Thomas Eijō, Keio University Press, 2010

藤　井　　淳

本稿では本年出版された高木訷元氏の著作『空海の座標―存在とコトバの深秘学』（以下『空海の座標』）とそれと密接に関連する高木訷元氏とトーマス・ドルトライン氏の英文による著作と翻訳 *Kūkai on the Philosophy of Language*（『空海の真言哲学』と日本語訳される）を取り上げる。

評者は博士論文として空海の思想を扱い、まだ駆け出しの研究者であったにもかかわらず、当時より高名な空海研究者であった高木氏に博士論文を詳細に見てコメントをいただき、博士論文をもとに『空海の思想的展開の研究』（トランスビュー、二〇〇八年）として出版し、その後、空海が将来した『三教不斉論』に対する研究として編著として『最澄・空海将来『三教不斉論』の研究』（国書刊行会、二〇一六年）を出版するなど空海の研究に携わっていることから、この機会を得て、高木訷元氏の空海に関するこれら二著作について書評を行いたい（本稿では客観的記述を心がけるため敬称や敬語を用いていないがご承知置き願いたい）。

高木訷元氏は空海の研究を本格的に行う以前、『古典ヨーガ体系の研究』『マータラ評註の原典解明』などの著書（『高木訷元著作集』として法蔵館より出版）に見られるようにインド古代思想史の専攻から出発し、高野山真言宗の宗門大学である高野山大学において、最澄と空海との書簡や空海の文章を集めた『高野雑筆集』などに対する文献学研究を行ってきた（詳しくは『空海の座標』「まえがき」参照のこと）。

本稿で書評を行う『空海の座標』は高木氏の空海に対する今までの研究を総括しつつ、空海の言語理解という哲学的側面に重点をおき、なおかつ一般読者に向けた著作である。これは同じく一般読者を想定した同氏の前著『空海　生

涯とその周辺』（初版一九九七年、吉川弘文館）が歴史的に空海を律令的な文脈で位置づけようとしたものであるのと対比すると重心の置き方の違いが明瞭である。『空海　生涯とその周辺』の改訂版末尾「空海を語る」で高木氏は空海の言語に関する著作に対して「その一々の思想内容に触れえないのを遺憾とする」（『空海　生涯とその周辺』二七二頁）とあったものを『空海の座標』で重心をおいて取り扱っている。一方で『空海の座標』は『空海　生涯とその周辺』に説明を譲っている箇所（三九頁注三七）があるなど両者は密接な関わりがある。

本稿の書評のもう一つの対象である *Kūkai on the Philosophy of Language*（『空海の真言哲学』）は高木訷元氏とトーマス・ドルトライン氏との共著・共訳であり、トーマス・ドルトライン氏は二〇一六年八月現在、高野山大学准教授である。この書が先行して世に出て、『空海の座標』と関係が深いことは後述する。

これら二著作が慶應義塾大学出版会より出版された経緯は井筒俊彦氏の空海への関心がもとになっており、*Kūkai on the Philosophy of Language*（『空海の真言哲学』）は The Izutsu Library Series on Oriental Philosophy（『井筒ライブラリー・東洋哲学』）の一冊という位置づけとなっている。『空海の座標』の中でもイスラーム研究者として著名な井筒俊彦氏の『意味の深みへ』（岩波書店、一九八五年）はしばしば言及されている（一四一頁注二〇、一八三頁注十二、二三一頁注三四、二三二頁注四三）。

『空海の座標―存在とコトバの深秘学』

（高木訷元、二〇一六年、慶応義塾大学出版会）

まえがきに「この著述は、（岡山県：評者注）倉敷市の村田隆禅師を発起人とする「勧縁会」での七か年にわたる研修の内容を、その骨子としている」（同書 iv 頁）とあるように、高木氏の自坊のある島根県大田市と中国山地を挟んで同じ中国地方において開催された研修会がもとになっている。本書中で空海の教育思想として取り上げられる綜芸種智院について、高木氏は資料をもとに他の空海関連の書に比べても多くのページを割いて（二四九～二六〇頁）解説をしているのも、本書が日本の現在の「大学」にかかわらない、真に学問に励む研修会の成果に基づくものであることによると評者は考えている。
本書の構成を述べると以下の通りである。

まえがき

序　章　仏教志向と秘門との出会い ――『聾瞽指帰』の撰述
　一　槐市の春秋 ―― 頗る藻麗を学ぶ
　二　槐市から山林へ ―― 山藪を宅とし禅黙を心とす
　三　秘門との出会い ―― 岐に臨んで幾度か泣く

起の章　入唐留学と秘門の受法 ――『請来目録』の読み解き
　一　唐都長安への路 ―― 尋ぬるに一乗を以てす
　二　梵語の学習と密蔵の受法 ―― 膝歩接足して彼の甘露を仰ぐ
　三　真言思想形成の起点 ―― 真言は幽邃にして字字、義深し

承の章　韜黙の一紀 ――「中寿感興の詩幷びに序」の読み解き
　一　最澄との出会いと別離 ―― 仏法の大事因縁を商量す
　二「中寿感興の詩」に見る密蔵のおもい ―― 長夜に円融を念（おも）う
　三　意味の深みへ ―― 一字一画は衆経を呑んで飽かず

転の章　密蔵法門の宣揚 ――「勧縁疏」の読み解き
　一「勧縁疏」撰述の意義 ―― 三心平等なりと知るを大覚と名づく
　二「勧縁疏」への反響 ―― 得ることの晩（おそ）かりしを恨む
　三　顕密二教の対弁 ―― 諸仏の談話、是れを密蔵と謂う

結の章　存在とコトバの深秘学 ―― 一字一文は法界に遍ず
　一「即身」の意味の深みへ ―― 存在の深秘学
　二　声字の実相 ―― コトバの深秘学
　三　文字の読み解き ―― 意味の深みへ

終　章　存在深層の構造
　一　十住心の教判思想 ―― 病源巨多なれば方薬非一なり
　二　空海の教育思想 ―― 教育の中立性と総合性
　三　深秘学の帰結 ――『般若心経秘鍵』の読み解き

なお、この書で扱われている空海の言語理解に関わる諸著作の多くは次に紹介する *Kūkai on the Philosophy of Language*（『空海の真言哲学』）で英訳されており、英訳を行った際の詳細な読解が本書の文面の背後に厚みをもたらしているといえる。

本書は主に一般的読者を想定したものであるため（ただ性格上、一般的読者には難しいと思われる箇所も少なくないことは後述する）、同じ空海の専門家である評者と見解が異なったり、評者が見落としたりしていた点を章立てに沿って指摘することでこの分野の研究の発展にいささかなりとも貢献したいと考えている。差異を強調する点があるとすれば失礼に対して寛恕たまわりたい。そして本書の概説的な評価は後に行いたい。

序章

本書は空海帰朝後に謀反の疑いをかけられて自殺することになる伊豫親王と空海との関わりについて、推測を交えたものであるが、興味深い考察を行っている（二〇頁・二四頁・四九頁・五八頁など）。

空海二四歳の著作『聾瞽指帰』から後年改められた『三教指帰』への変化として指摘される『三教指帰』の結頌である十韻の詩において方針が展開したこと（二六～二七頁）や「三教への評価がすっかりと変わった」（四〇頁）「三教斉合論の立場が表明されている」（四一頁）と述べられている。この理由の背景について、近年、村田みお氏が『最澄・空海将来『三教不斉論』の研究』（先述）に所載する論文の中で、空海が中国よりもたらした『三教不斉論』の記述の影響があったとしていることを指摘しておく。

本書は阿保人上（あぼのひとかみ）・道融（十七頁～十八頁）・橘広相（二二頁）・都腹赤（二五二頁）など評者も知らなかった空海と同時代の人物を取り上げ、空海の同時代における位置づけを図っており、啓発を受けた。空海を同時代に位置づけて理解するためには今後も不断の歴史資料の紹介が必要とされるといえよう。

『聾瞽指帰』に「「我は是なりと謂い、並びに彼は非なりと言う」と書かれているが」（三五頁）と記述する。これも評者は見落としていたが、後に『十住心論』巻第一で「各己が戟を美（ほ）めて己が楯を忘れ、並びに他の疵を発（あらわ）して他の善を蔽（かく）す。…是れ則ち…還って医王の雅意に乖（そむ）く」と述べるように論争を大局的な立場から調停しようとする意図は最も若い時期の『聾瞽指帰』の段階から見られると言えよう。

『聾瞽指帰』の「四果独一所不能及」（『定本弘法大師全集』第七巻三三頁）の理解について「小乗の徒輩ですらも及び得ない」（三六頁）とする箇所は「小乗の徒輩は到底及び得ない」ではないかと思う。

空海が入唐の動機として一般には『続日本紀』の空海の卒伝や「四恩の奉為に二部の大曼荼羅を造る願文」（『性霊集』巻七）が用いられるが、本書ではその他に『性霊集』序を使っている（四六～四七頁）。評者の著作では見落としていた資料であり、今後検討をしていきたい。

起の章

高木氏は「一乗」を『空海　生涯とその周辺』（該書六〇頁）に引き続いて「秘密一乗」と解されている（五八頁、九四頁）が、これについては評者の理解と異なり、拙著『空海の思想的展開の研究』六七～六八頁を参照のこと。

空海が入唐する前に“翻訳”された『守護国界主陀羅尼経』『四十華厳』との澄観についての指摘がある（六八頁）。澄観と空海との関わりについては十住心教判について加藤精一氏が「空海と澄観―真言と華厳との関係―」『印仏研』（四六―二、一九九八年）で指摘していたように思うが、今後も両者の関係を教理的側面から詳細に検討する価値があろう。

『請来目録』の記述に基づいて「顕密二教の最大の相違は成仏を「談」ずるのみか、それを確実に「期」するものとする点である、と空海は喝破するのだ」（九七頁）とある。このように「談」「期」などの字一つにも厳密な注意を払うのは英訳という作業を通じて丹念に読み込んだ成果と考えられる。

本書が『請来目録』に三部書や『十住心論』の萌芽も認められるとする（一〇一頁）ことは首肯でき、今後は『請来目録』からそれらの著作への展開について整理を行っていく必要があろう。

承の章

紙面としては最澄と空海との交流について、『空海　生涯とその周辺』の方が多くさかれているが、この章では高木氏が『空海と最澄の手紙』（法蔵館）を上梓した際の最澄と空海の交流に関わる文献学的な研究成果が縦横に生かされている。また井筒俊彦氏の空海の言語理解を念頭に置いて「意味の深みへと」（一二八頁）「意味の深みの読み解き」（一二九頁）「意味の深み」（一三三頁、一八二頁、二七八頁）という表現が多用されている。

「中寿感興の詩」の第四句の「安楽覩史は本より来た胸中なり」を「空海自身が極楽世界としての安楽国に言及するのは、全著作のなかにあって、ごく僅かに過ぎない」として「安楽なる覩史」の読みをとりたい、とされるのは妥当であろう（一二三頁）。当時の弥勒信仰から弥陀信仰への推移を考察する上で新しい重要な研究として、中国北朝の造像銘を検討した倉本尚徳『北朝仏教造像銘研究』（法蔵館、二〇一六年）を挙げておきたい。

転の章

高木氏が「空海は三論でも法相でもなく、入唐留学のための臨時度者としての得度を果たした」（一四四頁）とある箇所に対して、評者は拙著で述べたとおり、現在行っている『声字実相義』の精読を通じても、「空海は三論宗から出発し、入唐前後から帰国当初は法相宗に対抗する理論を打ち出すことが主であった」ことが改めて位置づけられると考えている。

「コトバを超えた世界が、実は、それ自体、コトバなのである」（一五四頁）と井筒俊彦氏が指摘しているとのことである。評者は詳しくは井筒氏の原著にあたって検討していないが、井筒氏は空海の言語理解を空海の文脈に沿う、というよりは自らの思想に引き寄せて理解している面があるのではないかと思う。

また徳一との関わりについて述べる箇所で「この（徳一の著述とされる：評者注）『真言宗未決文』は内容、文章ともに稚拙であり、到底、徳一の真筆とは考えられない」（一六四頁）という説が見られる。『空海の真言哲学』の時点では徳一が空海に反応して著作を著したとされている（該書二四頁）ので、この説はその後の進展といえ、一般とは異なる特徴的な説といえるが、現段階では評者は『真言宗未決文』の論点は空海の特徴を同時代の人物が外部からよく描き出していると考え、徳一の著作と考える。

結の章・終章

本書では高木氏の今までの研究を踏まえた著作ということに留まらず、多くの箇所で伝統的な説とは異なる解釈を示しているのも特徴である。『即身成仏義』に引用される『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』の一文を「旧来の慣例的な訓読が必ずしも正鵠を射たものとは思えないから」（一九八頁）として、『大日経』の意味と対照させて総合的に理解した上で「清浄にして垢染なし、因業なり」という箇所を「清浄にして垢染も、因業も無くして」（一九八頁）

と読んでいる。評者は拙著で空海の真理観が無因縁説と関わっていると述べた（拙著五一三～五一九頁）ことがあり、この読みは空海の思想を統一的に理解しようとするものとして評価できる。

同様のことは他に『声字実相義』の偈の一句「十界具言語」（『定本弘法大師全集』第三巻三八頁）を従来「十界に言語を具す」と読む箇所を「十界とは具（つぶさ）には言語なり」（二〇八頁）と読み、同じく陀羅尼の定義で「一切字中摂於一字」（『大般若波羅密多経』）とあり、「一切字の中に一字を摂す」とあるものを「一切の字の中に摂するは一字においてなり」（二一九頁）と読むこともできるとする箇所にも見られる。

いずれも重要な指摘であるが、評者はこれらの点についてすぐに回答をする能力がなく、いずれも回答までにしばらく時間をいただきたい。

そして、『般若心経秘鍵』の序文（『定本弘法大師全集』第三巻三頁）は従来、天台の明曠『般若心経疏』からとられたものとされているが、本書ではむしろ『般若心経秘鍵』の序文から明曠『般若心経疏』の一文が作成されたとしている（二六四頁）。このように従来の空海研究に対して、高木氏の新たな解釈の試みは「余談ながらも、…、明白に誤写と認められたものについては大勇を以て訂正して次代に引き継ぐべきであろう」（二六八～二六九頁）という姿勢に見いだせる。

宗門系の研究において、学術的な観点からであっても伝統説や先師の研究を否定ないし訂正することは長らくタブーとされてきた。それに対して学術的な観点をもって積極的な見直しを図ろうとする高木氏の真摯な態度の表れと言えよう。

本書への要望と概観

本書の多くの部分はコトバに関する空海の諸著作をとりあげ、それを解説していくという形をとっているため、特に前半部分で中国古典を踏まえた理解が諸処に示されているのが特徴である。実際、空海の著述は中国古典を縦横に踏まえているので、それらの知識背景のほとんどない現代の読者に対してこれらを詳細に解説する必要があり、本書中でも紙面の限りがあり、要を得ているが簡潔な記述は読者がかなりの知識を持っていることを前提にしているのではないかと思われる解説も多く見られる。評者は、大学での教育体験から、現在の大学生の漢文や漢字に対する理解力が教育制度のせいもあり低下している中、

今後の仏教の出版物では書き下し文にはルビを多くし、極端には全てにつける必要があると考えている。内容の高度さを保つことと今後の読者の理解力を判断しながら両立させるように執筆することは困難であり、自らも十全にすることは不可能に近いとも感じている。

また空海のそれぞれの著述に対する解説は、言語について重点をおいて取り扱われている点では本書に一貫した概説書としての性格を与えていることに成功しているが、やはり紙面が限られていることにうらみがある。評者としては、かつて那須政隆氏が成田山仏教研究所から刊行した、空海の著作に対する注釈のような書物を高木氏によって著していただきたいという思いがある。リーフレットの作成は本格的な出版でなければ、昔よりも格段に行いやすくなっているのであろうから地域の研修会での使用の便をはかって提供していただくことを切に願いたい。

また以下の二つはいずれも確かな説ではなかったり、伝聞であったりとするが、興味深い点でもあり、評者としては出典を知りたいというのが要望である。「わが国の遣唐使節がいつの頃からか、信義を重視して、国書を敢えて携行しなくなったのは、例の遣隋使小野妹子が携えた国書が煬帝の逆鱗にふれたことに起因するとも言われるが確かではない」（五六頁）。「俗説として、このとき福州長官の閻済美は空海の文筆についての異常な才能に魅せられて、自らの側近たらしめようとして、敢えて長安への入京を許す人名簿から空海の名を除いたとさえ伝えられている」（五八頁）。一方で本書は一般的読者を想定するものであるが、学術的ともいえるほど詳細に注がつけられている。

また本質に関わるものではないが、評者が本書中で気がついた誤記を記しておく。

『求聞指法』（四三頁六行目）⇒『求聞持法』
釈導（一五〇頁十三行目）⇒釈尊
華厳経学（一九一頁一行目）⇒華厳教学
心數（一九四頁一六行目）⇒心数
諸行無帯（二二四頁三行目）⇒諸行無常
堅固不壌（二四六頁一行目）⇒堅固不壊

本書は高木氏が空海と最澄との交流についての文献学研究に始まり、空海の生涯・思想を長年にわたって多面的に研究した成果の掉尾に位置づけられるものである。八五歳を超えての刊行であることは年齢の驚き以上に、本書が高木

氏の今までのきわめて高い水準の研究に支えられた上で、積極的に新たに解釈を行い、なおかつ後進を教育的に導こうという著者の真摯な姿勢に基づいているといえよう。

評者は空海を宗祖とする宗門に所属する人間ではないが、著者に学ばせていただいた学恩は言葉で言い尽くし得ないものがあり、その学恩に報いるためにも高木氏の姿勢に学びつつ、今後もいささかなりとも空海の研究を進めていきたい。

Kūkai on the Philosophy of Language（『空海の言語哲学』）

本書について書評を行う前に私事ながら評者の近況を記させていただく。評者は二〇一六年八月十七日より一月の期間でドイツ・ミュンヘン大学高等研究所（Center for Advanced Studies, CAS）からの招へいにより研究に従事することになっており、その際のプロジェクトの一つとして『声字実相義』を同大学のパウルス・カウフマン (Paulus Kaufmann) 氏と共同でドイツ語訳することになっている。

評者は現在その下作業として既に発表された欧文による『声字実相義』の翻訳を比較しながら読んでいる。既に発表された欧文翻訳はカウフマン氏の教示により下記のサイトを参照した。英文では高木氏・ドルトライン氏の本書を最後として四種類（羽毛田義人氏は抄訳）、ドイツ語訳では部分訳も含めて二種類、ロシア語は一種類となっていて、評者はロシア語以外の欧文訳を参照している。

【参照サイト】http://mbingenheimer.net/tools/bibls/transbibl.html

また本書の書評は Eric Swanson 氏により *Monumenta Nipponica* 66-2（二〇一一年）においてなされている。

本書の目次は以下の通りである。

Kūkai on the Philosophy of Language

Introduction
卽身成佛義　*Sokushin jōbutsu gi* (Buddhahood Immediately and in This Body)
聲字實相義　*Shō-ji-jissō gi* (The Meanings of Sound, Letter, and Reality)
吽字義　*Unji gi* (The Meanings of the Letter *Hūṃ*)

Appendices
I. 請來目録　*Shōrai mokuroku* (A List of Texts and Items Brought from China)
II. 中壽感興詩幷序　*Chūju kankyō no shi narabi ni jo* (A Poem in Reflection on My Fortieth Birthday, with an Introduction)
III. 金勝王經祕密伽陀　*Konshōō-kyō himitsu kada* (Secret Gāthās on the *Suvarṇa-prabhāsa-sūtra*)
IV. 梵字悉曇字母幷釋義　*Bonji Shittan jimo narabi ni shakugi* (The Siddham Mother-Letters [*mātṛkā*], with a Commentary)
V. 勸緣疏　*Kan'en no sho* (On Encouraging Those with a Connection to Buddhism)
VI. 實相般若經答釋　*Jissō Hannya-kyō tasshaku* (Comments on Questions on the *Shixiang bore jing*)
VII.　Glossary
VIII.　Sino-Japanese Characters
Further Reading
Index

Introduction では空海の生涯の簡単な紹介および空海の言語理解について重点をおいた解説がなされている。空海の生涯を「起承転結」に当てはめる構想は Introduction の二二頁～二五頁に取り上げられている。そして本体部分の翻訳として空海の三部書の『即身成仏義』『声字実相義』『吽字義』の翻訳がなされている。これら三部書は本書二五ページでは起承転結の結の部分にあたるとされている。

翻訳の体裁が本書の一つの特色となっているので紹介すると、見開き二頁の左上に漢文が原文で載せられ、見開き二頁に収まるように英語による翻訳と注釈が載せられている。漢文と英文が理解できる研究者や読者にとってはこのような紙面は両者を対照するのに非常に便利である。

Appendices には英訳としては初めてとなるものが多い、空海の諸著作が英訳されている。いずれも空海の言語理解のためには重要な著作である。これらは先に紹介した『空海の座標』で重点的に扱われており、『空海の座標』の理解は英訳作業を通じての精密な読解が基盤となっていることが知られる。

Appendices に訳された諸著作と『空海の座標』の構成の対応を示せば以下のとおりである。（カッコ内は『空海の座標』のページ数）

起の章　請来目録（六二～一〇一頁）

承の章　中寿感興詩並序　金勝王経秘密伽陀（一二七～一三二頁）　梵字悉

曇字母並釈義（一三六～一四〇頁、一八一頁）

転の章　勧縁疏（一四七～一五九頁）実相般若経答釈（一六六～一七〇頁、一八九～一九〇頁）

結の章　『即身成仏義』（一九〇～二〇三頁）『声字実相義』（二〇三～二一三頁）『吽字義』（二二〇～二二九頁）

評者はひとまず原文と対照する形で全ての英訳を通読した。英語を母語としないので英語の細かいニュアンスは分からないところがあるが、達意的で定評のある羽毛田訳と比べると逐語的ともいえるほど、明確に一語一語翻訳されており、非常に分かりやすい。「即是」「是」などでつなげられる同格表現も単に “is”“are” などではなく、意味を適格に汲んで翻訳されている。

現在『声字実相義』を六種の翻訳と対照させながら詳しく読んでいるため、本書の他の『声字実相義』の英訳四種について簡潔に評価しておくと、それら四種の翻訳者はいずれも三部書やその他の空海の重要な著作についても翻訳を行っていて、幅広く、かつ詳細に読み込んでいる。

一九四九～一九五一年に『密教文化』に所載された英訳は古語表現や英語としての表現に読みにくさを感じる。しかし真言宗の伝統に基づいて行われているものと考えられる注は全ては直ちに従えないものの、現在ではかえって見落としがちな重要な点を指摘している点で貴重である。

一九七二年に空海の生涯と思想について英文で本格的な紹介をした羽毛田義人氏の訳は一部省略されて訳されている箇所があるが、漢文や仏教語にたよらず翻訳されており、仏教語を前提としない英語ネイティブ圏の人には読みやすいのではないかと思われる。

一九九三年に発表された山本智教氏の翻訳はインド学・仏教学の豊富な知識に基づいた点が特色である。また山本氏は「実相」を true aspect と翻訳しており、これは他の訳が reality とするよりは鳩摩羅什訳の「諸法実相」のニュアンスを汲み取ったものと考えられ評価できる。

仏教伝道協会の英訳大蔵経の一つである Rolf W. Giebel 氏の二〇〇四年の翻訳は高木氏・ドルトライン氏の翻訳（二〇一〇年）より以前のものであり、それ以外の諸訳を参考文献にあげ、原文を見ながら省略された箇所を［...］とし、補った箇所を［　］で明示し、逐語的かつ穏当に翻訳がなされている印象がある。なかでも「文字」の翻訳として patterned signs としているのは、単に

letters への置き換えよりは空海のニュアンスを汲み取っているように思われる。

このように空海の著作はドイツ語二種も含め複数回にわたって翻訳がなされ、いずれも特色があり、学術的に検討に値する高い価値を有している。

その中で高木氏・ドルトライン氏の翻訳は高木氏の空海研究の厚みとインド思想に対する理解に支えられ、また英語をネイティブとするドルトライン氏との共訳ということもあり、学術的に貢献度が非常に高いと考えている。

また六〇頁を超える詳細な Glossary と漢文にも関心を持つ英文読者にとっては便宜のある漢字と英字表示の対照 Sino-Japanese Characters や Further Reading として空海に関する英文の著作や論文の紹介があり、空海に関心を持つ欧米圏の研究者のみならず、一般読者に対しても懇切丁寧なものとなっている。

最後に現在私が行っている『声字実相義』のドイツ語訳との関係で必要な部分のみ簡略に書くと、空海は『声字実相義』の一部で色塵が「顕色・形色・表色」を具えていることを示そうとする。私の理解では『声字実相義』で空海は「声」の理解をめぐって日本で当時最も優勢であった法相宗の言語観に対し、新しく言語観を示そうとしたものと考える。そこで『瑜伽論』に見られる定義を意識（引用）しながら、『大日経』に見られる表現との間で総合的理解を示そうとしている。しかし問題は複雑で空海は『大日経』を重視したが、『大日経』そのものの理解と空海の理解したい方向にはしばしば齟齬がある。今取り上げるのもその箇所である。

> 一顕色者五大色是。法相家説四種色不立黒色。依『大日経』立五大色。五大色者、一黄色、二白色、三赤色、四黒色、五青色。是五大色名為顕色。是五色即是五大色。如次配知。影光明闇雲煙塵霧及空一顕色亦名顕色。又若顕了眼識所行名顕色。此色具好悪俱異等差別。『大日経』云「心非青黄赤白紅紫水精色、非明非闇」。此遮心非顕色。

傍線を引いているのは『瑜伽論』巻一からの引用である。この箇所でまず色（カラー）の数をめぐって『大日経』が五色を立てるのに法相家は四色しか立てないとして法相宗への対抗意識が見えるのは明白であろう。さらに『瑜伽論』の顕色の定義を並べて引用して、最後に『大日経』の「心」と「顕色」が関わる箇所を引用している。ただし『大日経』そのものでは顕色・形色・表色という定義を意図しているのではなく、単に否定表現を重ねたもののように思われる。そしてこの最後の箇所の「此遮心非顕色」が問題となる。これを高木氏は This is to negate the concept that the mind may have color. と翻訳されている。

それに対し、私は「遮」という字は以下の文を否定するから、「この（『大日経』の一文）は（文面では否定しているが本当の意味は）心が顕色でないことを否定している（＝心は顕色である）」と理解している。つまり空海は『大日経』では否定的に言っているが、実際は「心は顕色（形色・表色）である」と言おうとしていると考える。

共同訳者であるカウフマン氏と私の理解は今までの解釈・翻訳とは異なっているため、今後の検討が必要であるが、そのように考える根拠は二点ある。その一つは『即身成仏義』に「心色雖異、其性即同、色即心、心即色、無障無礙」（『定本弘法大師全集』第三巻二三頁）とあり心と色との相即を説いているからである。『即身成仏義』は『声字実相義』の前に著されたが時期を置かず、ほとんど思想的な差異はない。また文面に即して二点目の根拠としてはこの形式は「形色」にもまったく同じ形で引用され、続く「表色」については「『大日経』云「心非男非女者」、亦遮心非表色。是亦通顕形色」としている。『大日経』にある「男と女」を表色と理解するのは理解しがたいであろうが、他に表色に明確に対応する箇所が『大日経』にはないから、空海はひとまずそのように理解し、さらに男と女は「顕形色に通ず」としている。「通ず」というのは否定的表現ではないから、従来の解釈に従えば、「男と女を表色に非ず」と否定すれば、「心は表色でもない」として「顕色・形色・表色」全てを否定することになるので「顕形色に通ず」とするのは不要である。それをあえて「顕形色に通ず」としているのは、空海は「（文面では否定しているが本当の意味は）心は表色である」と言っていると考える。

『大日経』は日本では密教経典に分類されるため一般の印象はともかく、大乗経典の延長線上として般若経典の影響が強く、否定的表現が多い。そのためしばしば空海の理解には適合しない箇所がある。先述したように『大日経』に「因縁を離れ」とある箇所を高木氏が空海の思想を統合的に考えて肯定的に理解しているが、これは空海の理解と『大日経』の傾向が相違するのを整合的に理解しなければならないからであろう。「遮」という一字についての理解というごくわずかな面で長く記述してきたが、空海と『大日経』との総合的な（そして差異の）理解をどのようにしていくかが今後の課題と考える。

とはいえ、三部書全てとその他の空海の言語理解を示す重要な著作の英訳は全体を俯瞰しており、評者が今回行った翻訳でも時間の限りもあり理解が及ばない点がある。

おわりに

評者は自らの研究の端緒より、高木氏の空海研究に啓発を受け、常に模範としてきた。しかし日々増大する大学の雑務に忙殺され、空海の研究からもしばらく遠ざかっていた評者には限られた時間しか与えられず、本稿で十全に評価をすることができなかったことをうらみとする。

先に述べたように今年の夏はドイツ・ミュンヘン大学において『声字実相義』を読解する機会を得て、これより出発する。本稿で紹介した二冊を受け継いで、筆者に与えられた課題として、空海を現代の中に位置づけた際にどのように著述が読み解け、また思想史的にどのように位置づけられるのかであろう。高木氏はイスラーム思想の研究者であった井筒俊彦氏の著述にしばしば言及している。シリア内戦を受けて、昨年、多くの難民―そして多くはイスラーム世界の背景を持つ―がドイツに移入し、ヨーロッパでは従来の居住者との間で軋轢の兆しが見え始めている。日本も世界の諸文明の中でもっとも遠いといえるイスラーム世界に対し、表層的な反応に終始するだけではなく、その考え方を根底から理解し、また日本の文化をイスラーム世界に対して伝えていく必要があろう。

空海に関しても、今後は欧米・アジアを中心とした世界のみならず、イスラーム世界にもどのように空海の思想が意義を持ちうるのかを説明する必要性が問われているといえよう。

〈キーワード〉　空海、『声字実相義』、『大日経』、法相宗